

S S T L

NO. 71 2021. 1. 2

職場参加ニュース

障害者の職場参加・地域参加で拓く—地域共生社会

12・6 共に働く街を創るつどい 2020 を開催しました



毎年障害者週間前後に開催している「共に働く街を創るつどい」が、今年もコロナ禍の下で開催され、63名が参加しました。

会場に来られない方々のために、6月の総会記念シンポに引き続き、当会吉田理事によるビデオ撮影、youtube 配信を併せ行いました。

総合司会を春日部市の地域活動支援センターパタパタ施設長の吉田久美子さんが務め、開会宣言。冒頭、当会山崎泰子代表理事より挨拶を行いました。

続いて、地元越谷市高橋努市長より、障害の有無にかかわらず共に働くことが自立生活や社会参加にとつ

て重要であり、この場でのさまざまな立場からの意見交換、情報共有は大変意義がある、市としても地域福祉計画や障がい者計画を全力で推進していくとの心強いメッセージをいただきました。



第1部：施設からの地域移行に始まり 三多摩・山梨つなぐSDGsの帯へ

埼玉県立大学教員の朝日雅也さんのコーディネートにより、第1部がスタートしました。

第一部は、伊藤勲さんの特別報告です。

伊藤さんが理事長を務め東京都日野市の障害者と共に生きるまちづくりの中核を20年余にわたり担って来たNPO法人やまぼうしが、今年一社・ソーシャルファームミレットロードを立ち上げ(代表理事は伊藤さん)、都のソーシャルファーム支援事業にエントリーした理由と事業内容について報告をいただきました。

源流に遡り次世代にバトン

背景は二つあると伊藤さんは語ります。

一つは地域で共に生きるという初心が、事業拡大のために障害者福祉法の要件をクリアーすることを重ねるうちに、サービスの提供者と利用者の関係が固定化



してきたこと。障害者だけでなく、外国人、困窮者、高齢者等の就労困難者を含む、共に働き共に生きる関係を再構築していくことが問われている。

もうひとつは、街の問題をトータルにとらえ、共に街を創り変えてゆこうとするときの事業資金について、これまでは伊藤さんが連帯保証人になり銀行から借りる形でやってきたが、そういう個人的な形でなく共同で出資して互いに共同責任を担う形にして次世代に引き継いでいきたい。

だからソーシャルファーム立ち上げ後、労働者協同組合への移行も考えているとのことでした。

プラットフォーム型 ソーシャルファーム

一社・ソーシャルファームミレットロード事業の内容は次の五つです。

1) やまぼうしの出発点である「おちかわ屋」の2階の空き店舗を使つての多世代交流拠点

2) アフタースクールカフェという発達障害者の働く場づくりの取り組みを継承してのコミュニティカフェ

3) 日野市プラスチック類資源化施設

4) 国立にある都の多摩障害者スポーツセンター内のコミュニティカフェ

5) 山梨県西原の雑穀の村と交流し、援農も含め収穫した作物を国立の施設で加工・共同購入、災害時の集団疎開も視野に。

このうち、3)については、元請け会社に既に4名の就労困難者の雇用を確保するとともに、伊藤さん自身が就労支援コーディネーターに就任し、3年後に市が元請け会社との契約を見直す形で進んでいます。

伊藤さんたちは、これら五つの事業を総括して、「F(フード)E(エネルギー)C(ケア)自給圏構想」をすすめる「プラットフォーム型ソーシャルファーム」と位置付けています。

問題多い都認証・支援事業 でも世に問うため応募した

一社・ソーシャルファーム・ミレットロードは今年5月に設立総会に踏み切ったのですが、その後に出たソーシャルファームの指針案はきわめてあいまいでした。志を同じくする団体と「都ソーシャルファームを考える会」をつくり、質問・要望書を出しました。要点は、就労困難者の基準、就労困難者の勤務時間や当事者の意向など勤務実態、事業運営の財源に占める事業収入の割合がすべてあいまい、審査会の委員が公募でない、審査結果は不透明、認証と支援の関係が不明などです。

しかしい、都は、聞き置くというだけで、当初の指針案通り決定してしまいました。

都の説明会には100団体が集まりました。その中から10団体に5年間で1団体総額7千万円の助成金が出ることになっています。

コロナで多摩スポーツセンターが閉所になり、事業実績があげられないなど、きわめて不利な条件があり、かつ都の支援対象は、一つの事業しか想定していないので、五つの事業全体での応募は不可能でした。

そこで、都の支援事業への応募では多世代交流拠点をソーシャルファーム「ミレット交流プラザ」とし、

- ① 有機食材の仕入れ・配送事業
 - ② 障害者 GH への配食・配送事業
 - ③ 大学等への出張販売事業 ④ 乾燥おから・野菜の加工製造事業
 - ④ コミュニティカフェ運営事業
 - ⑤ 多様な居住支援の場づくり事業
- として提出しました。

結果が出るのが2021年3月で、事業開始は4月。予算がつくかどうか分からない状況ですが、こうしたソーシャルファームの必要性を社会に問うべく、一步を踏み出しました。

第2部：障害者の職場参加・地域参加で拓く一地域共生社会

第2部は、私たちの足元の地域で、「共に働く」営みがいまどうなっているかを考えました。

知的障害者4人と高齢者ですぐれた技術を達成し、靴底加工会社を40年余り運営してきた(株)ニューオタニの尾谷英一さん、生活クラブ生協のワーカーズコレクティブとして企業組合「キッチンとまと」を20数年運営してきた須長こうさん、その「キッチンとまと」で職場実習中の就労移行支援「世一緒」利用者・大野言弥さんが参加。第1部の伊藤さんをまじえ語り合いました。

原点(人・街・川)から問う

尾谷さんは、今年2月から春日部で古利根川をきれいにするカヌー協会を立ち上げ、活動していると語りました。



今年の夏前半は雨が多かったが、8月からカヌーを出してゴミ拾いを手伝ってもらいながら漕いだり、10月には障害者のカヌー教室を開いたり、11月は水がなくなるので河原の清掃をやったりしてきた、春日部のカヌー協会では県の川の応援団に登録したので、ゴミ袋とか帽子とかいろいろ提供される、今度はニューオタニの親子会のグリーンリーブスでも、川の応援団を立ち上げようと思っているといいます。

先日埼玉新聞のインタビューで、「90歳まで働くつもりだ」と言ったら、「100歳まで」と言われちゃって・・・これからを楽しみにしていると。

というものの、一番の問題として、仕事のことは考えたくないぐらい壊滅状態。

「それ以上求めるとお客さんに迷惑がかかるのであまり働かない方がいいと思うんですね。今月で4分の1、先月は5分の1かな。今は週4日、

月火水木の午前中だけ仕事しています。1人も解雇していないと雇用調整金が100%もらえる。それで給料は100%払ってます。その雇用調整金が9月までって言ったのが、いいか悪いか、景気がよくなるから12月まで、さらに2月までという具合に延長されてきました。でも私としては、そんなのなくて、『景気が戻ったよ』と言ってお客さんが仕事を復活してくれるのがいいんだけど、お客自体が景気が悪くて供給できない。それが、私たちに出荷しているメーカーさん、つくる所で、秋田と岩手にある工場が、やはり減産しちゃったんですね。もう解雇しちゃったという状況。それで、今度やるかといっても、つくる場所がないんですよ。

だから正直、元に戻らないだろうということです。

それより県庁にあるかつぼさんで修理の仕事とか靴磨きをやろうかと思っていたんですけど、そこに出るっていう弟がちょっと病気になって、二つ目の手もまだふさがっているという状況です。」

「でもやることはいっぱいあるんですね。特に土日はソフトボール。今日も朝からソフトボールの支度をしてからここへ来ました。昨日は卓球バレー。」

(株)ニューオタニはかつて25人の従業員がいましたが、97年の山一証券倒産の時に靴業界全体が打撃を受け倒産、廃業があいつぎ、尾谷さんも廃業に踏み切りました。だが、障害者・家族が「給料なしでもいいから続けて」と訴え、障害者が主力の町工場として再出発しました。23年後、再び迎えた危機。長年かけて障害者たちとともに培ってきたわざ以外への転換はまったく考えていない尾谷さん。元には戻らないことを覚悟しつつ、仕事を奪われた時間を逆手にとって、スポーツで人、街、川をつなげ、「コロナ後の世界」を迎える、そんな(株)ニューオタニの姿が、無言で時代を問い直しているようです。



電話介し社会参加する大野さんと高齢者達の出合い



パネリストの1人として登壇した就労移行支援「世一緒」の利用者・大野言弥さんの発言がその時点でも、また youtube 動画を後から視聴してもよく聞き取れず、隣にいるお母さんの役割もわからなかったのが、就労移行支援「世一緒」の皆で動画を視聴しながら、大野さんに直接訊いてみました。

ひとつわかったのは、ナンバーディスプレイと留守電の設定のこと。「つどい」第2部で、大野さんをお母さんと挟む形で座っていたキッチンとまと代表の須長さんは、高齢者ばかりで働く店で、コロナで仕事も減っているところへ若い大野さんが来てくれてみんな元気になったと語ります。高齢者たちは電話をかけた受けたりしかできないので、電話に詳しい大野さんが来て、留守電の設定もしてくれて助かったと。

須長さん曰く「いつも一段落するとアナログやデジタルのことを教えてもらったり、電話のこととかお話ししています。」それに対して、大野さんは「今言おうと思ったんですけど、ナンバーディスプレイのこととか」。

大野さんは、ナンバーディスプレイにして、受ける前にかけてきた相手の番号がわかるようにしてはどうかと提案したのだといいます。

須長さんはみんなで大野さんの話を聞き検討した結果、個人用は400円だが事業用は500円かかるというので、もう少し我慢しようということになったそうです。でも、その代わりとして、留守電メッセージを入れてもらいました。また、大野さんはスピーカフォンになるように調整をして、お客さんとの応答を他の人と共有できるようにもしたのだといいます。

大野流ソーシャルディスタンスと母の役割

お母さんは、大野さんが初めての舞台での緊張をほぐすために頼まれたようです。が大野さんは自分が話しているときに、お母さんに見ざる言わざるでいてくれるように頼んだのだといいます。見られていると話せないからと大野さんは言う。へーと思って見たら、たしかに目をつぶり、耳をおさえています。



電話という回路を通し、一定の文脈の中で他者と交わりたいし、出来ればそれを仕事にしたい大野さんだからこそ、このディスカッションの場でも電話の話題なら言葉がほぐれてきます。大野さん流のソーシャルディスタンスのとり方。お母さんに目をつぶってというのは、他者たちとの交流をショートさせないでということでしょうか。特別支援学校で不登校まで経験した大野さんだからこそ、自分が他者たちといかに折り合いをつけるか、そのノウハウを苦悩の中から切り出しつつあるのではないのでしょうか。

言葉の重さと軽さ、人と人が共にいることの不思議さ。

キッチンとまと という かけがえなき時空

みんなで出資して働く場を作ったのが25年前。後継者づくりを探っていましたが、めどが立たず、70歳から100歳までを募集しよう方針転換したそうです。最年長は83歳、大野さんの次に若い人は74歳。宅配弁当は、一人暮らしの人で若い人向けのおかずが苦手な人に喜ばれ、安否確認にもつながっています。人生経験豊富な高齢者たちと独自の技で世界へ飛翔しようとする大野さんとが出会ったからこそ、これから多様な可能性がはらまれているのだと感じます。



エネルギーの自給とは

第2部の終わりに、朝日さんから、「会場のみなさんが聞きたいはず」と前置きして、伊藤さんに「エネルギーの自給とは具体的にどういうことですか」と質問を投げかけました。

伊藤さんは「大規模ではなくどこでもできる規模で」と答え、その例として「用水路でも小規模な発電ができ、非常時のスマホの電源確保になる」と述べました。交流している山梨の西原でもいまだに炭焼き小屋があり、水車があつて、雑穀、そば粉、水車が稼働しているが、そのノウハウを古くから引き継いでいくことが地元だけではできなくなっている、そこを仕事起こしに引き継いでいくとのことでした。

助かる存在・一流の職人

伊藤さんはまた、大野さんの例にふれ、オールマイティには働けないけれど、「この仕事についてはあなたがいてくれて助かる」というチームの中の自分の立場を作る、そういう仕事づくりがソーシャルファームの基本だと述べました。

いっぽう尾谷さんはうちの工場では、一家で近くに引っ越してきた例も含め、休日には一緒にソフトボールで大会に出るといった地域生活を共にする関係も含め、結果として各々が一流の技をもつ職人として育てている経緯を語りました。

コメンテーターから

語り合いを受けて、自治体の関係部局の担当者の方々からコメントをいただきました。



越谷市福祉推進課調整幹の西岡宏城さんは、就労支援の課題として二重の縦割り(分野別の縦割り、就労と福祉の縦割り)があるが、報告を聞いて感じたのは、働くにあつて短い時間しか働けない

人もたくさんいると思うので、さまざまな雇用形態で働ける人と市内の企業の仕事でいろいろな人にやってもらいたいというものをコーディネートする機能があれば、今後さまざまな問題の解決が図られていくのではないかと述べられました。



越谷市産業支援課副課長の秋山和之さんは、今後の産業振興において働き手をどう確保するかが課題だが、多様な担い手と多様な働き方の実現という二つの観点が大事だ、女性、高齢者、障害者等で意欲のある担い手が沢山いることに感銘を受けた、コロナ禍で打撃を受けた中小企業者等には緊急的な支援で事業継続ができるようにした上で、産業構造の変化に対応できるように支援、たとえば毎日職場に通えない人が働けるようにリモートワークを活用する支援など。今日の貴重な情報を今後の事業展開につなげたいと話されました。



越谷市障害福祉課調整幹の齊藤秀樹さんは、6月の総会記念シンプの時に、県職員で聴覚障害者の清水さんが「やさしい」という言葉の意味を皆さんは、どう答えますかと投げかけたことについて、月並みには「思いやり」だろうが、ある本に「気づき」とあつた、「気づき」、「気づいてあげること」・読んでほつとした、今日の話聞き、障害を持っている人の特性に応じてどんな働き方があるか気づくことの大切さと共通していると感じたと思われられました。

コーディネーターから



最後にコーディネーターの埼玉県立大学教員・朝日雅也さんから、かつて「福祉のまちづくりではなく、福祉で街づくりを」ということが言われたことを思い出したと次のように述べられました。

「職場参加の街づくり」というと職場参加しやすいような街づくりでとどまってしまうが、今日の討論を踏まえて、職場参加の考えが街に広がってゆくことによって、たとえば災害時や事業継承の問題、さらには伝統文化を伝えることが難しい、そういうところこそ職場参加で課題に取り組んでいく。その意味で「職場参加で街づくり」。それが地域共生社会なのかなと、力強く感じた。



共に働く街を創るつどい2020を踏まえて、今年度も提言をまとめました。近隣自治体首長の皆さまに直接手渡しし、懇談させていただく予定です。

① 共に学び育つ

障害のあるなしにかかわらず子どもの頃から共に育ち、共に学ぶことにより、心のバリアフリーが生まれ、こうした児童生徒の成長により地域における共生が進展します。「地域共生社会」への基礎固めへ向けて、貴市の保育、教育の見直しが必要です。

② 共に働く支援を

ここ20年、社会福祉の基礎構造改革等によりさまざまな支援制度ができましたが、制度によって人々が分け隔てられる弊害も生じています。当会の県営公園での花壇整備共同作業や越谷市共同受注ネットワークの神社等の除草作業には、就労系だけではなく生活介護等の施設からも障害者・職員が参加します。人は誰でも社会に参加し、他の人と一緒に動きたいのです。だからこそ、いま障害者も含めた市民、企業などすべての人々が役割を分かち合い、共に力をあわせて取り組み、すべての人々を社会の一員として迎え入れ支え合う「ソーシャルインクルージョン」が問われています。労働者協同組合法やソーシャルファームの動きを見据え、貴市としてインクルーシブな支援策の検討が重要です。

③ 担がれるだけでなく担い手にも

国連障害者の権利条約は「私たちの事を私たち抜きに決めないで」という世界の障害者自身の主張と行動が創り出しました。日本の障害者施策にも障害者本人が地域で他の人々と共に生きる関係の中から創ってきた活動が反映されています。入院治療やリハビリが必要な人や、常時介護が必要な人が、その人をよく知っている介護者の支援を得ながら、入院生活や就労、社会参加をできるように国も制度を整えつつあります。手話通訳や視覚障害者のガイドヘルプも障害者たち自身が関わって育ててきた制度です。ずっと働いてきて高齢になって要介護になった人についても、医療や介護を受けながら社会参加、とりわけ多様な形で職場参加できる施策を検討し、共生社会の担い手となる道を貴市としてひらくことが大切です。

④ 町工場やお店も地域福祉

省庁・自治体の雇用水増し問題や民間の雇用代行業問題、さらには悪しきA型問題など、障害者の割り当て雇用制度の綻びが甚だしくなっています。その一方、雇用義務からはずれた小さな町工場や店等が障害者雇用、さらには高齢者や外国人雇用の底支えをしている実態がわかっています。さらに、雇用の枠に入らない仕事の手伝いや職場体験の場として、さまざまな市民活動の場を活かすことも含め、貴市としてこれからの「地域共生社会」を創る「地域福祉」の構成要素として位置付け、支援策を検討する必要があります。

⑤ 市役所をお手本になる職場に

貴市は地域の最大の事業所であり、住民の生活に密着した多岐にわたる職場をもっています。障害者活躍推進計画を作成し推進されていますが、数字だけではない、「地域共生社会」のお手本として住民に示すことができる、障害者と共に働く職場づくりが重要な課題です。

⑥ いろんな計画に加えて

「我が事丸ごと」が叫ばれますが、つきあったことがない人のことは「我が事」として受けとめようがありません。障害のない人にとっても、障害のある人にとっても、同じです。上に述べたことについて、貴市の障害者計画、障害福祉計画はもちろんのこと、高齢者保健福祉計画、介護保険事業計画、子ども子育て支援事業計画、教育振興基本計画、地域福祉計画、総合振興計画等の見直しの際にも反映されるよう、あらためて提言します。

すいご Cafe News Flash



【11月11日 井原木奈美さん】

発達障害とわかった時は、それで生きづらかったんだって腑に落ちた感じはあった。若い頃は発達障害って言葉自体がなかったし、ずっと悩んでいた。みんなが普通にやっていることで

も、私はたくさん注意を払わないとできないし、疲れやすかったのも発達障害のせいなのかなと今では思っている。でも、どこまでが発達障害か、性格かわからない。もし発達障害が治ったら普通の女性みたいになるのか。女の子らしいことに興味ないのは自分の個性なんじゃないかな。全ての人が同じ方向に向かわなきゃいけないわけじゃないでしょ？と私は言いたい。



【11月18日 石井樹章さん】

昭和43年生まれ。中野区出身。小学生時代に2人の障害のある友達と一緒に遊んだりした思い出が印象深い。区別を知らない時代で、自分で「障害は～」、

「普通の人は～」って線を引かないうちに一緒に過ごしていた。それからいろんな地域活動に参加するようになった今、うまく説明できないけど、当時のその空気感がいろんな地域活動の中では手がかりになっていて、フラットに接することができるのはその頃の経験があるからだと思う。若い人と喋っていると、障害のある人達はその人達っていうことで理解した上で私達と一緒にやりましょうと話す人が多く、一緒にできないなら困っちゃう、みたいなイメージを取り払ってもらいたいと思う。



【11月25日 西嶋美子さん】

平成19～23年度の5年間で実施された「大阪府工賃倍増五カ年計画」で、初めて障害者や障害者施設に関わることに。社会の中で働いて生きがいを持って帰ってもらいたいというのが私達の目的

で、「福祉的から社会的事業所へ」が合言葉だった。施設を巡り、単純な作業でも分解して改めて人の配置をしたり、段ボールごとにテープの色を分けて誰でもすぐ目で見てわかるようにするなどの工夫を進めた。五カ年計画が終わり、これからの人生では、触法障害者(障害や認知症がありながら、福祉的支援がない為に再犯を繰り返す障害者)をサポートしたく、まず強制施設から出てきた人を福祉につなごうというプロジェクトを立ち上げた。手帳や生活保護を取れるようにして、自立支援につなげていきたい。



【12月2日 大家けい子さん】

10年程前から介護者サロンを運営している。介護をしている家族同士が日常的な介護の不安や悩みを話し合う場。介護の悩みは介護している本人でないと、

例え親族でもわかってもらえないという意見が多く、どこに相談したらいいかもわからず、悩んでいる方も多し中、同じ経験をしている人同士で話し合うことで、今まで言えないことも言えるようになって、わかりあえてよかったというふうによく言われる。私達もみんなと一緒に考えられたらいいなと。今はグループホームや特養、介護付き老人ホームなど、どこに入るにしてもお金が多分にかかるため、見れるようなら家で見ようという人が増えているし、高齢者は高齢者同士で生きていってね、という国の姿勢に疑問を感じる。



【12月9日 藤ヶ谷理江さん】

娘の郁美はダウン症。中学まで通常学級に行って、高校は行かずにパタパタに通って現在に至る。食べるのが遅かったりトイレに失敗するのがどうかなと思ってい

たけど、送り迎えは9年間したがそれ以外は授業にも給食にもつかなかった。林間学校は友達におんぶしてもらったり、普段の生活は郁ちゃんが～だったんだよとお友達が教えてくれた。郁美も楽しく通うことができたと思う。以前から同じクラスだったお友達は、6年生の時に郁ちゃんダウン症なの?!と気づいたくらい、自然にクラスに溶け込めたのが嬉しかった。

職場・地域ひろがりつうしん

●しらこぼと笛が BRUTUS に載った



マガジンハウスが月2回発行するライフスタイル情報誌 BRUTUS の12月1日号巻末にある「みやげもん」ページに、しらこぼと笛が登場！原作者のひな源・山崎昭二さんと並んでNPO 法人障害者の職場参加をすすめる会の名と電話番号、絵付け風景も。一躍全国ブランドに？！

●107の会(新障害者計画をすすめる会)粘り強く



当会や聴覚障害者協会、わらじの会他、越谷市の障害者団体関係者や家族等が障がい者計画や地域福祉計画に当事者の生活や労働の実態や思いを反映させるために集まって語り合っているのが107の会。写真は11月24日の話し合い。

●よ〜いどん！市民事業寄付制度に応募



生活クラブ生協越谷ブロック版「よ〜いどん！市民事業寄付制度」に今年も「すいごごトーク総集編・年誌作成費用10万円で応募中。12月25日の締め切りまでに組合員100名以上から1口500円以上の寄付申し込みをいただけないと、集まったぶんもいただけません。写真は三郷市文化会館内のレストラン「あおいそら」。ご協力をいただけるとのこと。ありがとうございます。

●延べ188名で秋の花壇整備共同作業



当会が公益財団法人埼玉県公園緑地協会から受託し、越谷市内の障害者施設等と共同で行っている県営しらこぼと公園の花壇整備作業は、春に向けてパンジー、ビオラの花苗移植作業を完了。12日間で延べ188名が参加。越谷流の特徴は就労系(A、B、移行)も介護系も一緒に参加していることです。

●ユニークな就労移行支援を展開中



せんげん台の就労移行支援「世一緒」は、野菜等の販売を常時行っているほか、火曜は越谷市役所脇のウッドデッキで出張販売、第4水曜は「すいごごカフェ・ゲストトーク」(写真)を開催。街の空気を吸いながら働く準備をするのが特色。その中から職場実習に出てゆき、就労して出てゆく人がこのところあいついでいるため、新規利用者大募集中です。048-971-8038 へどうぞ！

職場参加をすすめる会

2021.1~2021.3 カレンダー

(2020年12月20日改訂)

2021年1月		2021年2月		2021年3月	
日	日中行事	日	日中行事	日	日中行事
1日	金	1日	月	1日	月
2日	土	2日	火	2日	火
3日	日	3日	水	3日	水
4日	月	4日	木	4日	木
5日	火	5日	金	5日	金
6日	水	6日	土	6日	土
7日	木	7日	日	7日	日
8日	金	8日	月	8日	月
9日	土	9日	火	9日	火
10日	日	10日	水	10日	水
11日	月	11日	木	11日	木
12日	火	12日	金	12日	金
13日	水	13日	土	13日	土
14日	木	14日	日	14日	日
15日	金	15日	月	15日	月
16日	土	16日	火	16日	火
17日	日	17日	水	17日	水
18日	月	18日	木	18日	木
19日	火	19日	金	19日	金
20日	水	20日	土	20日	土
21日	木	21日	日	21日	日
22日	金	22日	月	22日	月
23日	土	23日	火	23日	火
24日	日	24日	水	24日	水
25日	月	25日	木	25日	木
26日	火	26日	金	26日	金
27日	水	27日	土	27日	土
28日	木	28日	日	28日	日
29日	金	29日	月	29日	月
30日	土	30日	火	30日	火
31日	日	31日	水	31日	水

日中行事

ほか

日中行事

ほか

日中行事

ほか

の中は、リハビリを兼ねた1~3時間内の屋外のアルバイトです。グループでやるので、初めての方でも大丈夫です。は、業務の場面の絵付けと、その普及・販売のための研修や営業活動です。は、障害のある人や他の人々が日替わりゲストとなって、暮らしや仕事を語り継ぎます。あなたもどうぞ！

○茶色の字のスケジュールは、主に連携団体の主催行事で、一緒に参加できるものの紹介です。

○ほかのスケジュールは、主に小グループでの講座やミーティングです。詳しい内容についてはお問い合わせください。

第54回 共に働くまちを拓くべんきょう会

「労働者協同組合法の成立」でなにができるように？

・話し手 田嶋 康利さん(日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会・専務理事)



- ・とき 2021年2月5日(金)、18:30~21:00
- ・ところ 越谷市中央市民会館5F
- ・会費: 500円(資料代) 手話通訳あり

全政党の共同提案で、2020年末の国会で「労働者協同組合法」が成立しました。

事業を共におこすまちづくり、女性たちのコラボや定年後の仕事おこし、「小さな農園事業」から障害者の親御さんと当事者の協同事業などさまざまな事業を「3人」から始められます。

いまあるNPO法人や企業組合、一般社団法人、株式会社、生協等とどう違うのか。

それらから移行することはできるのか。

そもそも、働く人たちが、出資をし、経営、運営にも責任を持つ協同労働という働き方は、どのようなことなのか。

法の実現をめざして40年、全国各地で1万5000名の出資者で実践してきた、ワーカーズコープの実例から、地域でできるヒントを語っていただきます。

主催・NPO法人障害者の職場参加をすすめる会

〒343-0023 越谷市東越谷1-1-7 職場参加ビューロー一世一緒内

TEL&FAX 048-964-1819 (要7回コール)

参加お申し込み 会場の関係で予め前日までにお名前とご連絡先を記して、下記FAXまたはメールでお申し込みください。なお、お申し込みが40名に達しましたら締め切らせていただきます。

FAX: 048-964-1819 (要7回コール)

メール: shokuba@deluxe.ocn.ne.jp

2020年度会費、寄付、協力会費を納入いただきました(五十音順、敬称略)

【2020年度会費】

会沢完、青木繁明、阿久津康仁、朝日雅也、石田貴美子、伊藤峰子、上野豪志、内野かず子、大武昭、大塚眞盛、沖山稚子、尾谷英一、黄川田仁志、癸生川新一、越野操、佐藤恵美子、佐藤秀一、澤則雄、清水泉、清水泰代、鈴木照和、関一幸、莊子敏一、竹迫和子、田島玄太郎、巽孝子、巽優子、田中利昌、谷崎恵子、津崎悦子、辻浩司、辻彩子、友野由紀恵、並木理、贄田俊之、西陰勲、及木聡、長谷川顕、幡本洋子、原和久、原田真弓、樋上秀、日吉孝子、正木敬徳、前田直哉、松田和子、松田典子、松山美幸、水谷淳子、森田譲二、谷塚祥子、山川百合子、山崎かおる、山崎茂、山崎泰子、山崎有子、山下浩志、山田裕子、山本正乃、湯谷百合子、吉田久美子、かがし座、くらしセンターベシム

【2020年度寄付】

伊藤勲、上野豪志、大塚眞盛、大家けい子、島根淑江、莊子敏一、鈴木照和、関一幸、津崎悦子、直井利雪、新相勝己、贄田俊之、西陰勲、増田真吾、松田和子、水谷淳子、富沢一枝、山下浩志

【運営協力費】

朝日雅也、田島玄太郎、贄田俊之